

教室一期生の思い出

高山龍三

大阪市立大学文学部地理学教室は1949年に設立されたが、翌50年入学の杉本、山岸が一期生となり、51年高山が二年に編入して、三人となった。二部の庄ノ昌士さんを加えると四人になる。杉本と高山は旧制高津中学で地歴研究部を一緒に戦後復活させ、山岸は天王寺高の出身、庄ノさんは関学卒の学士編入であった。

二年の夏、まだ正式に専攻も決まっていないうちから、教室の共同地域調査に参加した。それは単位にもならないものであったが、奈良県二階堂村（現天理市）の調査であった。前栽駅近くの飾東詰所に寝泊まりして、役場やいろいろな集落、農家を訪問した。川喜田二郎助教授（東京工業大学名誉教授）のリーダーシップによるカードシステムの始まりで、集めたデータを図書カードに書いて提出したものが、今でも研究室に残っている。

当時国鉄の学割は五割の運賃で、遠距離減率が大きく、回遊のつくり方や旅行の情報を、年輪的に先輩の庄ノさんに教わった。われわれは庄ノさんの実家や全国各地、いろんなところに旅行した。

1951、52年度の地理学関係の科目は、『文学部三十年史』によれば、地理学概論、地図学、自然地理学、集落地理学、経済地理学、文化人類学、民族学、歴史地理学、社会地理学、地理学特講、地誌学特論、外書講読、演習である。

当時大阪市立大学の杉本町校舎は進駐軍に接収され、講義は大阪市内の明治校舎（もと同小学校）でおこなわれ、研究室は鶴校舎（もと同小学校）にあった。三年の夏、実習と教室の共同地域調査を兼ねた砺波調査に参加した。福野の小学校を宿舎として、当時の鷹栖村（現砺波市）の散村の農家を訪問した。この調査のあと、村松先生たちと五箇山・白川の旅行をした。当時富山側からと岐阜側のバスはつながっておらず、県境の辺は歩いた。

村松先生の演習では、三人では発表の順番が早く回りすぎるといっているので、先生がほかの先生方、川喜田二郎、渡辺久雄（神戸女学院大学名誉教授）、岩田慶治（国立民族学博物館名誉教授）、水津一郎（京都大学名誉教授・奈良大学学長）、君塚進（大阪外国語大学教授）、木村宏（京都外国語短期大学教授）氏の参加を求められ、先生方も順番に発表され、またわれわれ学生の発表を聞かれた。なんともぜいたくこのうえない学問環境であった。

岩田先生には文化人類学、民族学を習った。地理学以外では、山根徳太郎（歴史学・難波京跡の発見者）、末永雅雄（考古学・榎原考古学研究所所長）、平山敏治郎（民俗学）先生の講義があった。高山は末永先生指導の考古学の巡検に連れてってもらったことがある。高山以外歴史専攻の学生だったので、先生が「高山、君は地理学だから、簡易測量ができるだろう。やり方を皆に教えてやってくれ」といわれ、歩測とコンパスで方向を測って、簡単な地図の作り方を皆の前でやったことが



あった。

三年のとき、川喜田先生の地理学演習で、小地誌作成の課題があった。一年間ひとつの地域をとりあげ、フィールドワークをしてデータを集め、それを組み立てて報告するというものであった。卒論の一年前にこのような小論文を書いたことは、よい経験であった。二、三年で共同調査を経験し、こんどは一人で研究をすすめた、川喜田先生の教育法に感謝している。

自然地理学は生物地理学として、吉良竜夫（琵琶湖研究所所長）先生に、学部から大学院まで習った。先生は理学部であるが文学部に出講していただいたのである。同じく学部から大学院まで、非常勤講師として出講していただいた京大の織田武雄、藤岡謙二郎先生の講義が隔週ニコマ連続であった。とても恵まれた教授陣であったと思う。先生方とはエクスカッションや飲みに行った思い出がなつかしい。また理工学部（扇町校舎）へ杉本と高山が一緒におしかけ、頼みこんで、池部展生先生の地学、中沢誠一郎先生の都市計画史を受講した。総合大学のよさをフルに利用した。

四年のときは卒論のための調査に集中した。杉本は近畿地方の民家を、高山は近畿地方の人口移動、とくに出稼ぎを、山岸は交通地理をテーマとした。三人なんとか論文にまとめた。教室には卒論が製本されて保管されているが、とても恥ずかしい出来である。

1954年3月、われわれは大阪市立大学文学部を卒業した。そして同年4月大学院文学研究科修士課程に入学した。地理学の講義、演習のほか、高山と山岸は大阪大学から出講していただいた小山隆先生の社会学特講を受けた。高山はある日先生に質問した。「社会学というのは理論の社会学と社会調査の社会学と、どちらが中心ですか」。しばらく考えておられた先生は、社会調査の方だと明言された。小山先生は社会調査の権威であったから、当然といえば当然の答えであった。

二年日の夏、1955年7月18日、村松先生指導のもと、庄ノさんを含む一期生四人は、中村泰三（大阪市立大学名誉教授）、石原照敏（岡山大学名誉教授）、池野茂（桃山学院大学教授）、武岡輝行、鈴木嘉幸さんらと先志摩和具調査をおこなった。この共同研究は、日本地理学会で報告（1956年5月）し、成蹊大学の柳田国男の研究所にも行って報告した。高山の修士論文は日本の人口移動をとりあげた。おもに統計収集と処理、地図化をし、人口移動の類型化や地域形成を論じた。この要約は『人文地理』（8-5、1956年）に掲載された。山岸の修士論文は「甲賀地方の交通地理」と題し、多層的地域交通構造の分析を試みた。杉本の修士論文は西日本全域を対象とした民家の地理学的研究であった。この要約は『人文地理』（9-6、1958年）と、『地理学評論』（34-5、1961年）に掲載された。

1956年、村松先生を中心に地理学科OB・大学院・学部学生の協力によって、阪神都市協議会から委託された「阪神大都市圏土地利用調査」をおこなった。翌57年には、大阪市隣接都市協議会の委託による「大阪市隣接都市一体性調査」と、西宮市の委託による西宮市実態調査をおこなった。この「大阪市隣接都市一体性の研究調査項目」は、のちに尾留川正平編『地理学調査法』のなかで、西川治氏によって、大都市地域の調査項目の例としてとりあげられた（1966）。

国際地理学連合の地域会議が日本であった。東京と天理でおこなわれたが、高山と山岸は志摩エクスカッションのお世話をした。川喜田先生がリーダーで、近鉄の車内で外の景観などを英語で簡単な説明を書いたメモを何回か手渡しして好評であった。志摩観光ホテルでは、先志摩のスライドを大塚隆さんの英語ナレーションで映し、これも好評であった。

1961年には日本国連阪神都市圏計画の調査と会議があり、委員の村松先生の仕事を教室の学生たち

も手伝った。国連と大阪市を中心にした協議会の合同のプロジェクトであり、何人かの欧米の都市学者と日本側委員（委員長栗本順三のちの阪神高速道路公団理事長）による会議が続き、英語のステートメントを一晚徹夜で翻訳したり、現地視察など、裏方の仕事をした。委員の村松先生と同じく委員の藤岡先生は京大地理学教室の先輩後輩であるが、またライバル同士でもあったので、藤岡先生が意見を言われると、それは藤岡の意見で私はこうこうと反論されたことを覚えている。

引き続き、第二次阪神大都市圏土地利用調査（阪神都市協議会）、建設省近畿地方建設局による委託調査、大阪周辺における土地利用調査（大阪、兵庫、京都、滋賀、奈良、和歌山）に従事した。前の土地利用調査同様、地理学専攻の学生、大学院生、OBを動員し、各地を担当してもらって、それを集約した。

近畿地方建設局の委託調査は、大阪周辺における土地利用の予測調査（1963年）におよび、大阪市立大学工学部道路工学の毛利先生たちと協力して、予測の数値を計算するものであった。当時は手回しの計算機の時代で、高山は幾日かの徹夜続きで、盲腸炎になりかけたこともあった。

1964年5月、大阪市立大学大学院文学研究科に博士課程がやっと開設され、杉本・高山が入学した。同年、兵庫県からの委託調査で淡路島の土地利用現況・経済予測と土地利用予測調査をした。村松先生らと淡路島の全市町村を回った。ある町では、町長以下町議員の陳情を受けるはめになった。また、大阪周辺における土地利用予測の修正（近畿地建）をおこなった。これら大都市圏調査の全貌については、村松先生の遡暦記念論集『日本の都市と村落』にまとめてある。

高山は1966年1月、東京工業大学理工学部助手として赴任するため、博士課程を退学、大阪を離れた。杉本は1968年「日本における民家の地理学的研究」で、文学博士の学位を授与された。この論文は『日本民家の研究—その地理学的考察』（ミネルヴァ書房）として出版された。山岸は高校の地理教育に専念するとともに、武岡・木田喜重さんらと社会科研究会の運営にたずさわった（本篇は高山が素案を書き、杉本・山岸が加筆した）。

（昭和29年卒業・昭和31年修了）